

発表タイトル	浮世絵を研究するために—役者見立絵の考証を中心に—
発表者所属名	日本文学研究専攻 教授
発表者氏名	山下 則子

「研究する」とは：方法や用いる資料が明示されていて、論証に傍証資料があること。

1, 浮世絵で研究の対象にできるもの：制作年、画工、版元、対象（何が描かれているか）を絞り込めるもの。→推論に客観的根拠を示すことができるもの。傍証資料*が整うこと。

* 文学、歴史、芸能資料で傍証する。故に文学、歴史、芸能関係の調査が必要。これらの中には活字になっていないものも多数ある。→変体仮名の勉強が必要。

特に有名な浮世絵師の作品は、出版年にも注意すること（明治以降のことがある）。

2, 浮世絵は、役者絵、美人画、名所絵が大多数を占める。→それ以外のものだけで立論するのは、普遍性がない。参考資料：『浮世絵は語る』（浅野秀剛・講談社現代新書・860円）

役者絵→江戸時代中期以降のものが考証しやすい。なぜなら傍証資料があるから。

【考証の順序】

同種の作品（揃い物）をできるだけ集める。歌舞伎役者を推定する。名前が書かれていない場合は、紋などの役者を現す模様と似顔から、描かれた役者を特定していく。改印（『錦絵の改印の考証』）、浮世絵師の絵の様式や版元の活動時期などからも、制作年代を絞り込み、役者（名前が書かれていても、何代目かを特定する）を推定する。歌舞伎資料と照合して、描かれている歌舞伎作品を推定し、どういう場面であるかを考察する。

【傍証基本資料】

歌舞伎の歴史と構造、主な作品や役者についての知識が必要。文学史の中の芸能の部分や芸能史（『日本芸能史』芸能史研究会編4～6巻や『歌舞伎の歴史 新しい視点と展望』歌舞伎学会編）の勉強をする。その上で必要な基本図書は『演劇百科大事典』、歌舞伎上演記録が載る『歌舞伎年表』（伊原敏郎）全八巻、『歌舞伎年代記』（立川焉馬）、『歌舞伎年代記続編』（石塚豊芥子）など。

台帳があればそれを読む必要があるが（『歌舞伎台帳集成』、『日本戯曲全集』）、台帳が残らない歌舞伎の方が多いので、内容を知る補助資料としての役者評判記（『歌舞伎評判記集成』に翻刻されている1772年までは活字で読める。それ以降の部分は所蔵先まで調べに行く）、絵本番付類も調査する。また、ほとんどの浄瑠璃は歌舞伎化されているので、浄瑠璃作品も有名なものは読んでおく。

役者のことを知るためには、伊原敏郎の三部作『日本演劇史』『近世日本演劇史』『明治演劇史』を熟読する。そして非売品ではあるが『歌舞伎俳優名跡便覧』（役者の生没年や改名の時期など）も、コピーを取っておく。似顔絵は役者の似顔絵集成『増補古今俳優

似顔大全』（早稲田大学演劇博物館）で覚えるのが安直ではあるが、これは後期以降の役者中心である。図録や美術全集の多くの役者絵で顔を覚えるしかない。

【傍証する時の留意点】

○揃物（同類の作品）の情報を集める → 様々な図録や美術全集に目を通す。例えば『浮世絵聚花』全巻、『秘蔵浮世絵大観』全巻、『原色浮世絵大百科事典』等々。

○歌舞伎上演記録（年表、年代記、番付類。傍証基本資料参照）との照合をする

○版元について調べる → 『近世書林板元総覧』、『原色浮世絵大百科事典』3巻

見立絵・やつし絵

見立絵 → ある人物や事物を、直接関係の無い別の人物や事物になぞらえた作品。

やつし絵 → 古典的な画題や事物・人物を、当世風俗に変容して描いたもの、雅から俗へ変容した作品。全般的な古典の知識教養が必要になる。特に謡曲は古典の集大成である。

【傍証する時の留意点】

○揃物（同類の作品）の情報を集める。

○役者見立絵は、役者絵のときと同様な傍証の留意点、考証の順序があり、更に何を何に見立てているのかを解釈する。その場合、揃い物全体への目配りが必要である。

○浮世絵師のイメージ環境をさぐる。つまり前代の類似作品（浮世絵、絵本、版本。俳諧や洒落本などの文学全般）からの影響を考慮する。

役者見立絵を解く

☆「見立三十六歌撰之内 坂上是則 みよしのゝ 山のしら雪つもるらし 故郷さむくなり
まさる也 時より」大判錦絵。三代目歌川豊国画。板元 江戸、伊勢屋兼吉。嘉永5年・
1852・11月改印。彫師 横川竹二郎。役者 四代目坂東彦三郎。

和歌の意味は「今夜は吉野の山には雪が降り積もつただろう。旅をした古都、奈良がますます寒気を加えてくるのだから」というもの。「白雪積もる」「寒くなりまさる也」を、享保11年(1726)大坂豊竹座初演浄瑠璃『北條時頼記』5段目切「女鉢の木」に登場する最明寺入道時頼に見立てる。時頼は出家後、民情視察のため諸国を行脚していたが、上野国佐野で雪道に行き暮れる。雪をかき落としている女に一夜の宿を乞うが、主(佐野源左衛門経世)の留守を理由に断られる。しばらく佇んでいた時頼が、帰宅した経世の妻白妙に再び宿を乞い、入れてもらう。夫が浪人して貧窮する白妙は、主人が大切にしている梅松桜の鉢の木を燃やして、僧に暖をとらせる。敵討ちをして帰宅した経世に、僧は身分を明かし、三箇の荘を与え子孫の代までの安堵を約束する。4代目坂東彦三郎が時頼を演じた記録はなく、本作制作近くでの『北條時頼記』歌舞伎上演もない。有名浄瑠璃の「女鉢の木」の段に、時頼にふさわしい役者として4代目彦三郎を見立てた。

三十六歌仙の和歌の一部分を、有名浄瑠璃の登場人物に見立て、更にそれにふさわしい役者を見立てて似顔で描いている作品である。